

ジェラルディン・ブルックス

### ケイレブ

ハーバードのネイティブ・アメリカン

本書の種は、アメリカ北東部マサチューセッツの小島に生まれたワンパンノグ族のケイレブ・チェーシャトウモークが、1665年に先住民としてはじめてハーバード大学を卒業したという記録。残された史料はほんのわずかです。

けれども著者ブルックスは、一気にフィクションの世界へと逃れてしまわずに、近年の植民期研究に学んで場と人物像を用意します。丁寧に再現した舞台と役者がひとりで物語を駆

動しはじめる。それは読者や著者さえも抱いていた定型や思い込みを乗り越えて思いがけない世界を織りなしはじめます。すぐれた歴史小説だけがもつ特性です。

主人公のひとりにして語り手でもあるのは、島の牧

師を父にもつ少女ベサイア。この厳格なキリスト教社会の規範では、女性の地位は抑制的なものです。けれども、生活に即して目をこらすとどうでしょう。ベサイアは、手伝いのために屋内に残っていること

しまいます。産婆術を学びとり、薬草を知り、食料を求めて外出すると、島そのものが自然の教科書だと知ります。父母に忠実な娘は、女は学はずとも良いという教えにも従おうとしますが、でも自然の摂理とその学習は神様がお認めのことじゃないかしらと思案したりもします。規範ががちり固めたはずの社会は、日々こうして揺れてしまうのです。

酋長の息子「ケイレブ」で、実兄とは対照的にしなやかな肉体をもち、聡明で、島の自然に通暁したとちがいます。ベサイアやケイレブらが生きるふたつの(あるいは交錯する)世界には、その日常のあり方から生まれる律動があるので

## 人と社会の織りなす律動

もの書く少女がみたアメリカの植民者と先住民

松原宏之

体験を咀嚼してしまふベサイアの目には、植民地社会の矛盾が映ってしまいます。入植者たちは、土地に合わない大麦栽培をあきらめられずに窮乏します。十分な防寒をしてやれず、苦勞して手に入れた羊も育てられませんが、草の根を探してやっこの思いで生き延びるのです。

の男の子と出会い、学ぶことで、ベサイアはキリスト教と植民地の規範だけにしづられない透徹した視点を育んでいきます。

植民者と先住民とのあるべき共生の姿を描いた、といった評は適切でありませぬ。手に取ればわかるように、本書は、天然痘の猖獗、両社会の対立、ハーバードに設置されたインディアン・カレッジの矛盾などを次々と描いていきます。けれどもだからといって、植民者が先住民を圧している、悲劇が再演されるのでは

です。島の人たる先住民の智慧や暮らしはおどろくべき発見に満ちたものです。彼女にとって、実の兄以上に近く、ときに先生役とも思えるのが島の

植民者が先住民を圧している、悲劇が再演されるのでは

★ジェラルディン・ブルックスII小説家、ジャーナリスト。邦訳に『マーチ家の父』(ピュリッツ賞)、『古書の来歴』など。一九五五年生。



四六判・448頁・2800円  
平凡社  
978-4-582-83791-9  
TEL. 03-3530-6573

